

学会ニュース

目次

・ 第34回大会および第35回大会について	1
【エッセー】		
・ 『蜂の寓話』に寄せるエッセー	川合清隆 2
・ 「逡巡する」イギリス	橋本登代子 4
・ 事務局より	7

第34回大会および第35回大会について

今年度の第34回大会は、2012年6月23日（土）、24日（日）に名古屋大学で開かれ、盛会のうちに終了しました。開催校責任者の長尾伸一会員をはじめ、名古屋大学の方々に篤くお礼申し上げます。

共通論題（「18世紀と自然災害ーリスボン、ナポリ、日本」）のコーディネーター佐藤淳二会員およびほかの発表者の方々、コンサートの出演者の方々にもお礼申し上げます。

来年度の第35回大会は一橋大学で開かれる予定です。開催校責任者は小関武史会員です。詳細は追ってお知らせします。

『蜂の寓話』に寄せるエッセー

川合清隆 (甲南大学名誉教授)

マンデヴィルの『蜂の寓話』(1705年)は啓蒙の世紀の奇書である。その寓話の諧謔、風刺、冷徹な人間観察、性悪説を唱えてためらわない反ヒューマンイズムの精神の豪胆さ、「私悪すなわち公益」というスローガンに表現されるモラルの大転換は衝撃的である。マンデヴィルがオランダからイギリスへやってきた移住者であることを考えると、フランスからオランダへ移住したピエール・ベールのことを思いやる。周知のごとく、彼もまた、「有徳な無神論者」が存在する、信仰を持たずとも人間は道徳的に正しくありうる、つまり、宗教から分離された国家社会の可能性を示唆して衝撃的であった。

a. ヴォルテール 18世紀フランスの啓蒙思想家のうち、マンデヴィルのような精神と思想を寛大に受容できる人物を探せば、その筆頭はヴォルテールであろう。研究史では、ヴォルテールが実際にマンデヴィルの影響を受けていることは確認されているようである。彼は1736年、『俗世人』(*Le mondain*)という短詩を発表してスキャンダルを巻き起こした。その詩のフレーズを抜書きすれば、こんな具合である。「あの古き良き時代を誰が惜しむだろう。[...]この世俗の時代は私の気性にぴったりだ。奢侈と安楽が私は大好き。すべての快楽、あらゆる芸術が好きだ。誠実な人間なら誰でも同じ感情を抱くだろう。[...]大陸の黄金、海洋の財宝、そこに住む人々、自然の諸民族、すべてが奢侈とこの世の快楽に奉仕する。ああ!この鉄の世紀は良き時代かな。」詩の最後で、キリスト教を毛嫌いするヴォルテールは、楽園のアダムとイブをほとんど破廉恥に揶揄してためらわなかった。「わが親愛なるアダム、君はエデンの片隅で何をしていたか。この愚かな人類の繁殖に励んでいたか。君は、わが母、イブ夫人を愛撫していたか。君たち二人はともに、爪は伸び、垢まみれであったろう。清潔がなければ、幸せな愛も恥ずかしい欲情。純粋な自然状態とはこんなもの。」(訳文はかなりの意識です。)墮地獄の汚名を浴びせられたヴォルテールはそれでもひるまず、さらに『俗世人あるいは奢侈の弁護』を追加した。

マンデヴィルの「ブンブンなる蜂の巣」の寓話は、各所でヴォルテールのエスプリによく呼応するが、印象的なのは「教訓」の結びである。大国民として繁栄しようとするなら、「ものを食べるのに空腹が必要のように、国家には悪徳が不可欠。美德だけでは国民の生活は壮大にはならない。黄金時代をよみがえらせた人は、正直と同じようにドングリにも自由に振舞わなければならない。」この最後の「ドングリ」云々は筆者には意味がとれないが、「黄金時代」という過去の「ユートピア」より、産業革命の到来が予告する「鉄の世紀」への肯定的意思は明確である。

b. ルソー マンデヴィルは、悪徳を放任する蜂の社会がいかにか繁栄した大国家を生み出すかを描写した後、「ジュピター神」を登場させて「わめく蜂の巣から欺瞞を一掃」させる。すると、すべての悪徳は除かれ、節制、質素、正直という美德だけの社会が出現する。いざ戦争となり、「正義や自由が危うく」なれば、「傭兵」を持たない市民軍は、「ただ祖国のためにだけ戦い、勇気と高潔」によって勝利する。この高潔な新国家では、「安楽は悪徳」となり、「節制」が進み、「浪費」はなくなる。しかし、大国家の繁栄は影を潜め、輝きを失う。蜂の群れはもはや私欲に駆られブンブン不平を言うこともなく、「自足と正直に恵まれ」、小さな「木のうろ」に閉じこもり、蜂の寓話は終わる。

この縮小した清貧の国家像から浮かび出るのは徳の小共和国であり、そのイメージに最もマッチするのは、ヴォルテールに対峙したルソーである。マンデヴィルの評価では、「偉大な蜂の巣を正直な巣」に変えようとするルソーのような類は「馬鹿者」である。なぜなら、「ひどい悪徳もなく安全に暮らそうなどは、頭脳にのみ巣くう空しいユートピア」を語っているにすぎないからだ。

c. マルクス 彼は『資本論』の中で、マンデヴィルについて短い感想を述べているが、悪徳がはびこる社会の様相をこれほどあからさまに正直に認めたその態度に好感を示している。『蜂の寓話』には、2種類の資本家が登場する。「莫大な資本でほとんど苦勞なく、利得の大きい事業に飛び込んだ者」と、そうではなく、「資本はいらず鉄面皮だけで、詐欺師同然、[…] 隣人の労働を役立てようと狡猾に細工した手合い」である。この2種類の資本家は、資本の「本源的蓄積」以前と以後の違いを連想させる。マルクスによれば、イギリスで本源的蓄積を可能にした共同地の囲い込みと私有地への併合は、暴力的な強奪による農業革命であり、「私悪が公益」に転じた瞬間である。こうしてヨーマンリーは壊滅した。農地を失い、土地から解放されて自由な鳥となった農民たちは、大挙して都市へ流れ込みプロレタリアートとなって資本主義発展の土台を形成した。マルクスは、「イギリスの労働者階級は、過渡段階を経ることなく、その黄金の時代から鉄の時代に転落した」と記している。

よく知られているように、黄金時代へのノスタルジーをためらいなく語るルソーは、『人間不平等起源論』第2部の冒頭で、「囲い込み」に激しい怒りを表明した。「杭を引き抜き、溝を生め、[…]” 果実は万人のものであり、土地は誰のものでもないことを忘れるなら、君たちの身の破滅だぞ”、と同胞に叫んだ者がいたら」、その人は、「いかに多くの犯罪と戦争と殺人、そしていかに多くの悲惨と恐怖を人類に免れさせただろうか」。このルソーの叫びは、私悪(私利)が公益となり、奢侈(消費)が美德となるその後の資本主義の歴史を振り返るとき、確かに敗者の思想の〈ユートピア〉で空しく木霊するだけである。

d. 現代の奢侈的消費

では、18世紀の奢侈論争が象徴する資本主義市場経済への時代の転換から2世紀を経た今日、ルソーのような奢侈反対派の敗北は確定したのだろうか。先進国と称する現代の大国家における消費レベルは、啓蒙思想家たちが問題とした消費レベルとは桁違いである。

20世紀に入りフォーディズムによる大量生産システムが完成した。大量生産は大量消費を生み出さずにはおかない。後者がなければ、前者は存続できない。大量消費システムを開発したのは、フォードと市場を争ったジェネラル・モーターズである。斬新なデザインの新型車を市場に投入し、メディアを使って大宣伝を行う。大衆はデザイン美に魅せられ、まだ乗れる車を捨て新車が買いたくなる。最後に現金がなくてもモノが買えるクレジット制度の発案である。ファッション・宣伝・クレジットによって消費を煽るこの様式は、世界的大恐慌とニューディールの直後に成立し、二一世紀の現在も基本的に変っていない。

しかし、この景気を支えるための奢侈的消費の新システムは、資本主義の健全性(?)を一段と劣化させた。今日、コマーシャルなしに大量消費は持続されない。一九六〇年代、かつて強力であったイタリア共産党はコカ・コーラの不買運動を展開したが敗北した。巨大資本の宣伝力にかなわないのである。現代の各種メディアを活用したファッションナブルな大宣伝は、消費者にほとんど〈洗脳〉に近い影響力を持つ。市民消費者は、幸福をモノの所有に見出し、モノへの欲望に駆り立てられ、時には買物依存症という心の病にまで陥る。消費の大半はもはや〈生活必需品〉ではなく〈奢侈品〉である。しかも、商品価格には宣伝費が組みこまれ、消費者はモノ自体の価格のみならず、宣伝による欲望喚起の代償まで負担する。退廃的消費の極みはクレジットとローン制度である。もしこれを法律で禁止できれば、市民の消費生活の健全化にどれほど役立つだろう。現代では、会社のみならず、サラ金のローンを背負いこんだ市民が自己破産する。今や、消費によって景気を支えることが、良き市民の資格である。

しかし、クレジット制度が引き起こす最大の問題は個人でも企業でもなく、国家である。ギリシアはいうに及ばず、1000兆円の国債を抱える日本もその渦中にある。赤字国債による財政経営は、先に消費し、支払い後は、という現代消費システムの国家版である。この赤字国債による国家経営の方式を初期の段階で、もし法律で禁止できていたら、豊かな社会への歩みは緩慢で、社会は今ほど華麗な外観を持たなかつただろうが、その姿はもっと健全であつたろう。しかし、この「もし…ならば」も、

敗者のユートピア的空想である。

マンデヴィルの「私悪(利)すなわち公益」を原理として繁栄を謳歌した大国家、今日先進国と呼ばれる国々は途方もない負債を抱えている。その財政状況は、フランス革命時のルイ王朝のそれと酷似している。この難題をわれわれはフランス革命を再演して解決することも、「消費税増税」で解決することもできないだろう。しかし、いずれ危機はやってくる。そのとき、本当の馬鹿者はマンデヴィルかルソーか、どちらだったかが最終的に判明する。(泉谷治訳『蜂の寓話』、法政大学出版局、1985年、参照。)

「逡巡する」イギリス

橋本登代子（同志社大学神学部博士後期課程）

オリンピック開会式のテレビ画面でチャールズ皇太子夫妻が拍手をしている光景を見た。私人であるか公人であるかについてあいまいな印象を与えている皇太子夫妻には一瞬冷めた感情を覚えた。エリザベス女王が開会宣言を簡単に終わると参加者たちの熱気が伝わってきたのであるが、イギリス文学を専門に研究してきた者にとって、連合王国としての現在のイギリスより近代イギリスの方がはるかに魅力を備えているように思う。過去のイギリスについては一研究者としての個人的な関心をもってはいるのに過ぎないのであるが、ジョンソン、ボズウェル、バーク、ゴールドスミス、オースティン、フィールディングなどが残した小説、詩、伝記、逸話などは、my dear memoriesとして記憶の引き出しの中で重要な位置を占めている。18世紀は合理主義の時代とも呼ばれたが、文学作品を丁寧に鑑賞すると、個人の情感を現実に生きる人々に向けた詩人や小説家たちの心情が豊かに伝わってくる。近代イギリスの文学作品は現代イギリス文化の予徴を密かに内包している。

OEDは「時代の精神」という語の使用はイギリスにおいてP. B. シェリーによる1820年のことであると記している。シェリーは18世紀に誕生し19世紀に活躍したが、詩人は社会の預言者であり立法者であると自負している。時代という語の概念については、ある時代の社会構造における政治的、宗教的、文化的価値観があり、後の社会において過去と今が区別され、過去の価値観が相対的に後退する現実に注目して「時代の精神」という語を使い出したのであろうと筆者は推察する。

18世紀のイギリスは国として革命を経験したわけではない。しかし17世紀から国教会と分離派諸派の政治的、宗教的あつれきがアメリカ植民地を生みだし、18世紀の後半にそれを失うという経過を辿った。スコットランドとの同君連合は18世紀の始めに達成されている。20世紀になって、北アイルランドの統合など歴史上の状況がさまざまな分野において研究者の思考を刺激し、研究の対象領域が広がった。アメリカ植民地、南米植民地と本国との関係に注目してベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』という名著を世に送ったのもその一例である。

“What is true is what all men recognize as truth. And ‘all men’ includes the dead majority as well as the living minority.”とGeoffrey Tillotsonは*Eighteenth-century English Literature*の序文で記している。18世紀の文学的遺産を現代社会の文化的、社会的文脈から考察してみると、ジョンソン博士が好んだ「コーヒーハウス」は公共圏の存在を示すものであるし、バークの『フランス革命への省察』は現代イギリスの君主制の存続を確かなものにした要因でもあった。ゴールドスミスが「廃村」と題する詩で示す疲弊した故郷への視点は時代や社会を超えて読者の共感を得ている。19世紀におけるジョン・ラスキンやウィリアム・モリスの講演活動もあって、現代のイギリスは環境保護政策には積極的な態度を示している。フィールディングは『アミア』において、角灯と6尺棒しか持たぬ夜警の老人が屈強な

若者に暴力を振るわれる場面をブースに目撃させている。18世紀には警察制度は整ってはおらず、スコットランドヤードとして組織が整備されるのは後のことである。19世紀になってトーマス・カーライルは警察と軍隊を社会のエプロンであると表現した。1928年から選挙権が男女平等になって、オースティンのヒロインたちの判断力を認識していた読者もコモン・ロー概念に敬意を示すこととなった。また、17世紀末からのケンブリッジプラトニストたちの宗教的心性は、19世紀にはF.D. モーリスを中心とするキリスト教社会主義の改革的運動を導き、一方ロマン派詩人たちを通じてヘレニズム文化への関心を呼んだ。『金枝篇』が多くの読者に愛読されたのもその例として挙げることができる。18世紀イギリスの文学者たち、神学者たちの感性的認識は現代イギリス社会の基礎となるべく「流れの傍に植えられた木」(a tree firmly planted by streams of water. *The Psalms* 1:3)であったのだ。

マシュー・アーノルドは教養が精神に及ぼす浄化作用を持っていると信じ、『教養と無秩序』の中の「優美と英知」と題する章で彼が考える教養の定義をしたのであるが、上に記したようにフィールディングやゴールドスミスの小説、バークの議会での演説にも「優美」な精神を発見することができるし、聖書の伝承の世界との絆を小説のエピソードに挿入したオースティンの小説には人間の「英知」を悟ることができる、と考えている。ここではバークの「優美」な情感とオースティンの「英知」と呼べる知性の働きをより詳しく対照的に考察してみる。

バークは*Speech on Conciliation with the Colonies*において大英帝国の雅量をアメリカ植民地の人々に示すべきであると述べ、「コヘレトの言葉、3:1」からの「何事にも時があり／天の下の出来ごとにはすべて定められた時がある」という内容を響かせて下記のように述べた。

The superior power may offer peace with honor and with safety. Such an offer from such a power will be attributed to magnanimity. But the concessions of the weak are the concessions of fear. When such a one is disarmed, he is wholly at the mercy of his superior; and he loses forever *that time and those chances which, as they happen to all men, are the strength and resources of all inferior power.*(*The Norton Anthology of English Literature*, Vol.1, 4th ed. 2420)

また、バークが*Reflection on the Revolution in France* において「騎士道の時代は去った！」とマリー・アントワネットの運命に涙した文章にも情感が溢れている。

Little did I dream when she added titles of veneration to those of enthusiastic, distant, respectful love, that she should ever be obliged to carry the sharp antidote against disgrace concealed in that bosom; little did I dream that I should have lived to see such disasters fallen upon her in a nation of gallant men, in a nation of men of honour and of cavaliers. I thought ten thousand swords must have leaped from their scabbards to avenge even a look that threatened her with insult.—But the age of chivalry is gone. (*Eighteenth-Century English Literature*, 1277-1278)

現代イギリスが議会政治を維持し続けている背後には、革命の時代と表現される日々個人的情感を誠実に表現し、伝統と社会の秩序を重視した文学者が存在したからであろう。

オースティンの作品においては、中心人物としての若い女性たち、彼女たちは倫理観、品性、判断力が与えられているが、家計の財政についての心配は常に伴う。たとえばその中の一人、エマ・ワトソンには牧師のハワード氏との結婚がほのめかされている。創造上の女性たちに真実感を与えているのが写実的な描写である。その描写の中で印象に残るのは、「他者の証言」と表現できる場面の挿入である。たとえば、『高慢と偏見』の中でエリザベスはダーシーのペムバリーの屋敷を訪問したときに、彼の女中頭から彼の評判を聞く。エリザベスの心の計りは彼を長年知る彼女の「証の言葉」を聞いて、ダーシー寄りに傾くのである。

近代市民社会においても、旧約聖書の世界でも、何が真実かを探る場合には証言は大切なものである。イザヤ書の内容を例に挙げるまでもなく、他者の心の真実を知りえないわれわれにとって真実を求めるときには常に「他者の証言」を必要とするという事実は昔も今も同じである。一見深遠な思想とは関係の無いものとして考えられがちなオースティンの作品群であるが、人間社会の在りようを真実に描いているのは、人間の限界を知る女性作家の知性であると思われる。

オリンピックの閉会式ではロバート・バーンズの“Auld Lang Syne”の合唱がロンドンの空に響くであろう。“land of mist-shrouded mountains, of peaceful and solemnly beautiful valleys, of storied and romantic streams”(Select Poems of Robert Burns, “Editor’s Preface”)と形容されるスコットランドの風土は誇るべき子供たちをイギリスに与えた。「聖なる言語」が衰退し、行政言語ではこの想いは伝わらぬ、と思ったのであろうか、スコットランドの詩人の言葉と情感は世界の人々の想いを一つにするであろう。

引用文献

- Arnold, Matthew. 『教養と無秩序』(Culture and Anarchy) 多田英次訳 岩波文庫、1971年。
- Boswell, James. *Life of Johnson*. The World’s Classics. Oxford: Oxford University Press, 1980 rpt. 1985.
- Burke, Edmund. *Reflections on the Revolution in France*. *Eighteenth-Century English Literature*. Ed. Geoffrey Tillotson. New York: Harcourt Brae Jovanovich, Inc., 1969.
- Speech on Conciliation with the Colonies*. *The Norton Anthology of English Literature*. 4th edition. Vol.1 New York: W.W.Norton, 1962 rpt. 1979.
- Burns, Robert. *Select Poems of Robert Burns*. Boston: D.C. Heath, 1897.
- Carlyle, Thomas. 『衣服哲学』(Sartor Resartus) 岩波文庫 石田憲次訳 1946 rpt. 2010 年。
- Clarke, Peter. 『イギリス現代史』(*Hope and Glory: Britain 1900-1990*) 西沢保他訳、名古屋大学出版会、1996年。
- Fielding, Henry. *Amelia*. Ed. Martin C. Battestin. Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1983.
- Goldsmith, Oliver. “The Deserted Village” *Eighteenth-Century English Literature*. Ed. Geoffrey Tillotson. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1969.
- 白石隆・白石さや訳 『想像の共同体』(Benedict Anderson. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso, 1983.) リプロポート、1987年。
- Tillotson, Geoffrey, Ed. *Eighteenth-Century English Literature*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1969.
- 内田能嗣・塩谷清人編 『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』 世界思想社、2007年。
- 新共同訳聖書
辞典
OED
DNB



事務局より

学会サイトの移転について

「学会ニュース」前号でお知らせしましたように、国立情報学研究所の学協会情報サービスが終了したことにともない、当学会のサイト配架のアドレスに移転しました。

<http://www.gakkai.ac/jsecs/>

前号末尾には古いアドレスが残っていました。大変失礼しました。

『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、数年前から、大会での発表をもとにした論文以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

国際18世紀学会の名簿について

すでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴアル大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。（<http://www.isecs.org> → ISECS-direct ; フランス語版ではRépertoireという項目です。そこから人名や国名に従って探せます。）

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合は、ご自分で訂正していただくか、管理責任者（Pascal Bastien. admin@isecs.org）に連絡してください。

（英語でもフランス語でも通じます。名簿ページ上端のContactボタンからも同じアドレスにつながります。どうしてもわからない場合は事務局にお知らせください。）

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用してください。

※ 新入会員の方については、日本18世紀学会事務局から国際18世紀学会のサイト管理責任者にお名前だけ知らせてあります。そのような事情で、お名前はすでに記載されているはずで、なるべく自分で上記アドレスにアクセスして、公表したいデータを登録してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。（上記サイトの画面上部のISECS-directまたはRépertoireボタンから名簿にアクセスできます。）

※※名簿データ変更の必要がなくても、国際学会のサイトをご覧ください。国際学会に関する情報のほか、シンポジウムなど各種の情報が掲載されています。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限ります。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないというご不満をお持ちの方は積極的にご推薦ください。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は10月半ばまでに、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。なお、口座番号は以下の通りです。

00950-2-178903 名義：日本18世紀学会

寄付のお願い

別紙要領をご覧ください。

寄付のお礼

前号以来、以下の方々から寄付がありました。お礼申し上げます。（払い込み順、敬称略）

増田真	10口	10,000円
計 1名	10口	10,000円

学会への献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

- ・ジャン・ル・ロン・ダランベール『ラモー氏の原理に基づく音楽理論と実践の基礎』片山千佳子、安川智子、関本菜穂子訳、春秋社、2012、vi+257 p.

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を

申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくお願いたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一、伊東貴之(東アジア交流担当)、王寺賢太(国際幹事)、小田部胤久(国際学会執行委員)、川島慶子、斉藤涉、関谷一彦(年報担当)、武田将明、田邊玲子(年報担当)、寺田元一、長尾伸一(東アジア交流担当)、馬場朗、逸見龍生、堀田誠三、増田真(代表幹事)、

会計監査：玉田敦子 中島ひかる

日本18世紀学会ニュース 第70号 2012年9月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 増田 真

事務局 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 増田(仏文)研究室

e-mail: jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp

tel. / fax: 075-753-2766

<http://www.gakkai.ac/jsecs/>